

VOICE OF LIFE

[ボイス・オブ・ライフ]

01

2020.AUTUMN

Take Free

世界に目を向け、未来を見つめる。

対話から紡ぐ選択肢

取材／安田菜津紀・佐藤慧

シリア人少女の言葉から



Dialogue for People

爆撃により右足を失ったサラちゃん。
ただそこに生まれただけで、戦争に巻き込まれていく命がある。



アメリカ主導の有志連合軍による空爆の傷跡が生々しいシリアの都市、ラッカ。正義を冠した戦争でも、市民は巻き込まれて命を落とす。

ある少女のつぶやき

「何も悪いことしてないのに」と、サラちゃん(8)はうつむきながら呟きました。ここはイラク北部クルド自治区。モダンな高層ビルがそびえたち、街の中心にあるきらびやかなショッピングモールでは、家族連れや恋人たちが談笑しています。片道4車線の幹線道路には、汚れひとつない高級車も少なくありません。「イラク」と聞くと、戦争のニュースを思い浮かべる人も多いと思いますが、少なくともこの街の光景を見ていると、どこか欧米の大都市だと勘違いしても不思議ではありません。

その街の片隅の病院に、サラちゃんは入院していました。難しい手術を終えたばかりで、ベッドに横たわっています。「突然落ちて来た爆弾で、サラの右足は吹き飛んでしまったのです」と、サラちゃんのお母さんのナリマンさん(30)が目には涙を浮かべながら教えてくれました。

2019年の10月、シリア北部のカミシリという街に住んでいる

隣国からの侵攻

たサラちゃん一家は、北に国境を接する国、トルコの軍隊が攻撃を仕掛けてくるというニュースを聞き、避難する準備をしていました。大人たちが荷物をまとめている間、子どもたちは家の周りで遊んでいたと言います。突然ドーン!という大きな音が響き地面が震えました。お母さんが家の外に飛び出すと、サラちゃんのお兄さんのムハンマドくん(13)が、爆弾の直撃を受け亡くなっていました。もうひとりのお兄さん、アフメドくん(11)も右目に重傷を負い、サラちゃんは爆発の破片で右足を失ってしまったのです。

長い間戦乱の続いていたシリアでは、十分な医療設備もなく、医師の足りない地域も少なくありません。サラちゃんの手術のためにも、一家はシリアの東に隣接する国、イラクへと出国しました。

この数年、イラク・シリアで猛威を振るっていたIS(過激派勢力いわゆる「イスラム国」)は、アメリカを主導とする有志連合軍と、その支援を受けていたクル

ド人を主体とする軍隊「シリア民主軍」との攻勢に敗れ、風前の灯火と言われていました。その結果を受けて、アメリカは駐留していたシリアからの撤退を表明、順次軍隊の撤収を始めていました。その隙に乗じてシリア北部に攻め入ったのが、トルコ軍でした。ISとの戦闘に疲弊していたシリア北部の街々を、国境を越えて侵攻、次々と街を制圧していきま

なせトルコ軍はシリア北部に攻め入ったのでしょうか。国境に接する街、デレクに住む友人はこう言います。「トルコ軍は、シリア北部にいるクルド人のテロ組織を壊滅するための侵攻だと言っている。でも、本当にそうでしょうか。なぜ彼らは市民の住む街に爆弾を落とし、罪もない人々の住居を奪い、略奪を行うのでしょうか。これはクルド人に対する虐殺ではないでしょうか。こう語ってくれた友人は、サラちゃん一家と同じく、シリアで生まれ育ったクルド人です。現在この地域で起きている混乱の原因のひとつに、クルド人の帰属問題というものがあります(コラム参照)。

対話から紡ぐ選択肢

シリア人少女の言葉から

取材／安田菜津紀・佐藤慧



安田菜津紀(やすだ・なつき)／中東・東南アジア、アフリカ、日本国内で貧困や災害の取材を進める。東日本大震災以降は陸前高田市を中心に、被災地の記録を続ける。TV、ラジオ番組などにもレギュラー出演中。



佐藤慧(さととうけい)／アフリカや中東、タイモール、自然災害の被災地などを取材。世界を変えるのはシステムではなく人間の精神的な成長であると信じ、紛争、貧困の問題人間の思想とその可能性を追う。

COLUMN

書き換えられた国境線。「国」を持たないクルドの人々。

「世界最大の少数民族」とも呼ばれるクルド人は、3~4千万人ともいわれる人々が複数の国境に跨る地域に暮らしている。現在の中東地域の国境線は、第一次大戦後、イギリスやフランスといった戦勝国によって恣意的に引かれたものが元となっているが、当初の分割案では、クルド人を中心とした独立国家も建国予定だった。しかしその地に油田があることがわかると、国境線は書き換えられ、クルドの人々はそれぞれの国でマイノリティとして暮らさざるを得なくなる。トルコでは総人口の2割をクルド人が占めているが、トルコ政府は長い間、「クルド人」というアイデンティティを認めず、「同化政策」をとり続けてきた。他の国々でも、クルド語の禁止や、市民権のはく奪、中央政府による弾圧や虐殺などが続いた。そうした抑圧の中で、トルコ国内では武装組織PKK(クルディスタン労働者党)が結成される。ときに市民の犠牲も厭わないPKK



毎年3月21日はクルドの新年であるノウルーズが祝われる。家族で着飾り、草原へピクニックへ行くのが伝統的な過ごし方。

の暴力行為は、トルコ市民からも恐れられ、トルコ政府と衝突を繰り返すことになる。シリア北部にいるクルド人たちは、「そのPKKと同様の殲滅すべきテロリストだ」というのがトルコ政府の言い分であり、その砲撃のひとつが、サラちゃんの右足を吹き飛ばしたのだ。

[上]ムディナさんと一緒に戦禍から逃れてきた子どもたち。[下]爆撃により右足を失ったサラちゃん。ただそこに生まれただけで、戦争に巻き込まれていく命がある。



VOICE OF LIFE

敵という虚像

「どこにテロ組織がいるっていうんだい?わたしたちこそ知りたいよ!」と叫ぶのは、そうしたトルコ軍の侵攻から逃れてきたムディナさん(70)。持病を抱える夫や、大家族の子どもたちを連れて、シリア東部の街の学校に身を寄せていました。「ついこの間だって、ISが侵攻してきて避難したんだ。やっと少しは落ち着いたら日常を取り戻せると思ったら、今度はトルコ軍が攻めてきた。子どもたちの中には、飛行機の音が

トラウマになってしまった子もいるんだよ。同じく空爆から逃れ、隣国イラクの難民キャンプで暮らしているハムデイさん(19)はこう言います。「軍事施設だけじゃなく、市街地も空爆の標的となっています。僕の家の近所では、お年寄りや子どもたちも爆撃に巻き込まれました。どの国も自分たちの『正義』を掲げて戦っているけれど、そんなものは嘘だと思えます。資源や国境線、過去から続く国と国同士の諍い。戦争を正当化するために、『敵』をうちあげ、自分たちを『正義』と

敵

呼ぶ。そんなものに振り回されて犠牲になるのはいつも市民なのです」。

攻撃をしかける側の思い描く「敵」とは、本当に実在する存在なんでしょうか。「敵」や「テロリスト」といった言葉でくくられる人々も、私たちと同様に顔も名前もある存在なのだということが、その言葉によって覆い隠されてはいないでしょうか。そういった人たちから見たら、攻撃する側こそ「敵」や「テロリスト」に思えるかもしれません。大雑把にくくった対象を相手に、「報復」や「自衛」を掲げた戦争が始まり、それがまたお互いの「敵」という虚像を鮮明に浮かび上がらせる。そんなループが延々と繰り返されているように思います。

もう「こんなこと」は止めて

「○○人は嫌い」「○○人は敵」。そんな言説は、何も紛争地域だけに見られるものではありません。勝手に区切られた国という境界線や、民族、人種や宗教、性別や社会的地位。そうしたいくつものレッテルで人を区切り、実体的ない集団を嫌悪する行為は、日本でも「ヘイトスピーチ」などとして

表出しています。「ヘイトスピーチ」と「戦争」は、けっして繋がりのないものではありません。誰かの存在を否定するという行為は、最終的にはお互いを殺し合う戦争や虐殺に行きついてしまうのではないのでしょうか。

今現在の、そして将来起こり得る争いに歯止めをかけるために、私たちにもできることがあります。たとえばもし、憎しみの渦中にいる人に「銃を取る」以外の「選択肢」を提示することができたら、その手は違う方向へと伸ばされるのではないのでしょうか。そのためにも、この限りある世界の中でどう私たちが共生していけばいいのか、「敵」という線を引く前に、「対話」を重ねていく必要があると思います。

「私たち、何も悪いことしてないのに」と、ベッドの上でサラちゃん小さく呟きました。「もうこんなことは止めてって、大きい人たちに伝えて」。彼女の言う「大きい人」とは、戦争などを起こす「大人たち」のことでしょう。その言葉はどこかの誰かではなく、私たちひとりひとりに対して投げかけられたもののように響きました。

BOOK OF LIFE



シリアのことをもっと知りたい方に！



シリア 震える橋を渡って 人々は語る

著/ウェンディ・パールマン
訳/安田菜津紀・佐藤慧

岩波書店 3,520円(税込)
2019年8月23日刊行

ともすると政治や資源戦争といった大きな話で語られてしまうシリア戦争を、数多くの市民の言葉から浮かび上がらせる証言集。戦前、戦時下、そして現在に続く混乱の様子を、老若男女、軍人、母親、子どもたちの視点などから見つめなおす。自由のための闘争は何をもたらしたのか。

Dialogue for PeopleのWEBサイトからお求めいただけます



料理は大皿に盛りつけられ、みんなで手を伸ばして食べる。

忘れることのできない家庭の味

D4P Kitchen

by Kei Sato

世界各地を取材で訪れる中で、いつも新たな発見や喜びをくれるのが、地元の友人たちとの食卓です。かしこまったレストランでの食事もいいですが、温かな家庭の台所の味は、忘れることのできない大切な思い出となります。クルド文化を含むイラク、シリアの食卓では、ケバブや豆のスープ、自家製のヨーグルトや羊の煮込み料理が振る舞われます。中でも、「ドルマ」と呼ばれる料理は絶品です。ピーマンなどの野菜をくりぬぎ、中にトマトで味付けをしたライスや肉などを詰めた料理なのですが、地域によっては野菜の代わりにブドウの葉を使って具を巻きます。具材の酸味と、ブドウの葉のほどよい苦みが奏でる絶妙な味わい。そして何より、「また遊びにおいて」という食後の温かい言葉が心を満たしてくれるのです。

編集後記

船橋 和花 / D4P広報部



VOICE OF LIFE 第1号、いかがでしたでしょうか。手にとって、じっくり読んでいただける紙の媒体をつくりたい！と、構想すること数ヶ月...気持ちが入りすぎて、タイトル決めに思いの外時間がかりましたが、私たちが届けたい、世界各地で今を生きている人々の「声」に焦点を当て、満を持しての発行となりました！コロナ禍で皆さんと直接お会いすることが中々できずにいる今、紙面を通じて少しでも距離を縮めることができたら嬉しいですね。

Dialogue for People

NPO法人Dialogue for People (ダイアローグ フォー ピーブル/D4P)
国内外さまざまな地域で社会課題の渦中にある人々を取材し、写真や文章、映像などさまざまな表現を通じて、「伝える」ことを軸に活動するメディアNPOです。どこか遠くの問題に思ってしまう出来事について、誰もが考え、自分の役割を見つける機会を創造し、社会課題の解決につながるきっかけを生み出していきます。

Twitter、Facebook、Instagramはこちらから！

d4p

検索

https://d4p.world



各国での取材をYoutubeで配信！



荻上チキさんの解説、東小雪さんとの対談、取材報告、インタビュー、カルチャー紹介ほか、幅広い番組をお届け中。

D4P YouTube Channel Youtubeで検索！

d4p

検索

